

『三十三年の夢』の漢訳本『三十三年落花夢』について

寇 振 鋒

1. はじめに

宮崎滔天（1870～1922）の『三十三年の夢』は、日本において多くの人に歓迎されたのみならず、清末中国にも導入されるほど広まっていた。

『三十三年の夢』が単行本として発行された1902年8月の約一年後、清末中国において、章士釗（1881～1973）によって『大革命家孫逸仙』という題名で抄訳された¹。そして、初の漢訳本『孫逸仙』発行から三ヶ月も経たずして、翌1904年1月には上海国学社より公刊され、「金一」というペンネームでの金松岑（1874～1947）による『三十三年落花夢』というもう一種の漢訳本もあった²。1930年代までに刊行された、金訳本後の十数版の『三十三年落花夢』はすべて、この金訳本のうわべだけを変えたものにすぎないと言える。つまり、清末と民国時期の中国における『三十三年の夢』の漢訳本は、基本的に『孫逸仙』と『三十三年落花夢』という二種類の訳本が取り上げられる。

発行の版数から見れば、『三十三年の夢』の漢訳本は原作の十版³を遥かに超えており、民国時期の1930年代まで少なくとも十九版まで刊行されたと見られる。

『孫逸仙』と『三十三年落花夢』はともに政治宣伝の視野から漢訳され、清朝政府統治下では禁書であった。これにより、『三十三年落花夢』は清末ないし民国時期の政治宣伝において影響力がいかに大きかったか想像できる。初の漢訳本『孫逸仙』に関しては、すでに筆者なりの考察を行ったものの⁴、しかしながら、管見によれば、金訳『三十三年落花夢』の漢訳を詳細に検討した論考は皆無に等しい。

1930年代に至って少なくとも十六版まで刊行された『三十三年落花夢』は、近代日本が近代中国の文学作品ないし思想宣伝に強い影響を及ぼした一作だけではなく、近現代中日関係史上の重要な史料でもある。それゆえ、『三十三年落花夢』を考察する意義は大きいと考えられる。本稿では、革命派的文学作品という角度から、『三十三年の夢』のもう一つの漢訳本『三十三年落花夢』を取り上げて、日本から中国へ取り込む際に生じた諸問題についての検討を行うとともに、その政治的影響について実証分析を行うことを目的とする。

2. 印刷、製本および翻訳・出版時間について

この初版『三十三年落花夢』は1904年1月に、上海国学社によって公刊された。印刷

者は日本人野口安治で、印刷所は日本東京市牛込区神楽町1丁目2番地にある翔鸞社である。しかし残念ながら、筆者所見の上海図書館所蔵の原本は、製本中においてミスがあった。つまり、第19頁から30頁までの部分が第64頁と第65頁の間に製本されている。ただし、すべての初版本にこのようなミスが存在しているかどうかは、現時点では不明である。

初版『三十三年落花夢』公刊の時間は1904年1月12日である。冒頭にある訳者の「説略」の日付は旧暦1903年10月1日で、すなわち西暦1903年11月19日である。「説略」に指摘されている「二ヶ月の力を尽くし、煩瑣をいとわず訳した。」という証言から見れば1903年11月19日が筆を擱いた日付である。そのため執筆開始時間は西暦9月19日までさかのぼることができると思われる。つまり、7月19日頃から訳し始めたと考えられる。

『孫逸仙』の公刊時間は1903年10月12日以降である。『孫逸仙』の訳者章士釗は鄒容(1885~1905)と親交があった。章士釗は鄒容の『革命軍』の草稿を修正したこともあるし、初版『革命軍』の三つの文字も章士釗によって書かれたものである⁵。金松岑は鄒容と同じ部屋であった。しかも、金松岑は鄒容の『革命軍』の出版にも資金を援助した。金松岑はまた章士釗が創刊した『国民日々報』(1903年8月7日創刊)の編集に携わった。そのため、彼らの関係から見れば、この漢訳について、章士釗と金松岑は互いに知っていた可能性がある。

3. 『三十三年落花夢』の諸版本について

『三十三年落花夢』は1904年1月初版のほかに、1905年3月20日に上海群学社より発行された再版も見られる。この再版の印刷者は日本ではなく、国内の上海作新社である。なお、『三十三年落花夢』は再版してからまた、広州『時事画報』にも連載されたことがある。

管見によれば、清末において少なくとも以上のような『三十三年落花夢』の版本が存在する。民国時期に入ってからの場合については、上海図書館所蔵によると、1925年5月から1934年5月(出版合作社版)にかけて、P.Y.校刊の『三十三年落花夢』は第八版まで重ねている。この訳本は、いったいどのようなものであるのか、金訳本とどのような関わりをもっているのか、以下言及していきたい。

このP.Y.とはいったい誰であるか、現時点では不明であるが⁶、少なくとも日本語のできる(もしかして日本に留学した)革命志士であろう。まず「P.Y.」と署名した訳者の「重印贅言」を見よう。

この「重印贅言」の日付は1925年4月20日である。同年3月12日に孫文が息をひきとった。そこで、「重印贅言」において次のように記述している。

中山（孫文——引用者）先生が死んでから、思わず往事を追憶するし、更にその書（『三十三年落花夢』——引用者）のことを追憶せざるをえない。（中略）私たちが最も喜んだのは、意外にも原本を一冊入手したことである。その日から急いで翻訳に従事し、すでに半分以上を訳し終わったが、更に嬉しくてたまらなかったのは一人の友人が故郷で当時の訳本を見つけたことであった。探し出てきたので、すでに訳した前半も放棄した。ただ原本と旧訳本と新訳本の三つを一通り校訂し、結局旧訳本に些か略した箇所を補充しただけで、早速印刷に回した。⁷

また「重印贅言」によると、当時、P.Y. が探し出した訳本はかなり破損したもので、訳者はすでに不明であり、幸いにも冒頭の「訳者識」と署名した「説略」は完全であった。そこで、P.Y. はこの「説略」をそのまま「重印贅言」の一部として写し取ったと言う。対照してみると、この「説略」はすなわち金松岑が1903年11月19日に書いたものであることが明らかである。そのため、P.Y. の言う旧訳本とはすなわち金訳本のことである。「重印贅言」では、「旧訳本に些か略した箇所を補充しただけである」と述べている。その補充した箇所については、いわゆる新旧訳本（金訳本とP.Y. 訳本）を対照してみると以下のようにになっている。

| 章節 | 金訳本 | P.Y. 訳本 |
|---------------|---|-------------|
| 第3章「余之家庭」 | 天将 | 大将 |
| | 一兄 | 長兄 |
| 第16章「再入夢寐之郷国」 | 出亡一小冊題曰 Sun Yutsen Kidnaped in London | 出書一小冊，視之： |
| 第18章「素人外交家」 | □太□ | 皇太后 |
| | □太□ | 皇太后 |
| | □太□ | 皇太后 |
| 第27章「惠州之革命」 | 惜命惠州革命之事之不成 | 惜哉惠州革命之事之不成 |

実際は以上のようにP.Y. に修正、削除、補充された箇所が数箇所だけ見られる。それ以外は、金訳本とP.Y. 訳本はほとんど同じ内容である。むしろ同一訳本だと言っても過言ではない。つまり、第八版まで刊行されたP.Y. 校刊本『三十三年落花夢』は基本的に金訳本であると言える。

なお、遼寧省図書館所蔵の、王文英によって新式の句読点をつけられた1934年2月に上海・大達図書供給社より再版された『新式標点：三十三年落花夢』がある。これは、P.Y. 校刊本に「，。！？：『』」、および傍線など新式の句読点をつけただけである。つまり、王文英によって句読点をつけられた二版の『三十三年落花夢』はまた、

P. Y. 校刊本と一致している。初版の年月日は再版の奥付に現れていないが、『新式標点・三十三年落花夢』は少なくとも二版まで刊行された。

そして、1932年に林蔭初訳『三十三年浮雲之影』も存在している⁸。なお、上海図書館所蔵によると、もう一種、A. K. 訳『三十三年落花夢』が存在し、1934年5月に第三版（中国研究社版）まで重ねている⁹。上述の二種類の版本は未見であるが、しかし「民国以後、かつて訳者の名称の異なる数種訳本が出ていたが、実は金訳本のうわべだけを変えたにすぎない。」¹⁰、と指摘されていることから、以上の林蔭初訳本と A. K. 訳本は、恐らく依然として金訳本を基にしたのであろう。つまり、ただ1934年の一年間だけで、三つの版が再版された。1904年から1934年まで、『三十三年落花夢』は少なくとも十六版まで刊行された。

ちなみに、新中国成立後も、漢訳本は引き続き台湾や中国大陸で刊行されている。例えば、1952年に台北・帕米爾より発行された金松岑訳『三十三年落花夢』、1977年に台湾中華書局より発行された宋越倫訳『三十三年落花夢』、1981年に花城出版社より発行された佚名初訳、林啓彦改訳・注釈『三十三年之夢』¹¹、1989年に台湾水牛出版社より発行された陳鵬仁訳『三十三年之夢——宮崎滔天自伝』がある。

以上のような諸版本の刊行時間から見れば、『三十三年落花夢』は中国の同時代の思想啓蒙の読本として三十年余りにわたって愛読されたことが明らかである。こうした幾多の再版を繰り返したのは、読者の志向に合わせた選択によるものだと言える。つまり、『三十三年落花夢』の生命力が近現代中国において相当強かったと言わざるをえない。

4. 初版『三十三年落花夢』の訳者について

金一と署名した訳者金松岑は、江蘇省呉江の出身で、清末愛国志士、教育家、文学者である。名は懋基、天翻、天羽で、号は壮游、鶴望で、ペンネームは麒麟、愛自由者、天放楼主人、金一などがある。1903年上海で愛国学社に参加し、章太炎（1869～1936）、鄒容、蔡元培（1868～1940）らと一緒に革命宣伝運動に従った。その生涯は資産階級民主革命の宣伝に努めた。

金松岑は最初に『マホメット伝』を他の人と共訳した。この『三十三年落花夢』を訳したことに加え、金松岑はまた後述する薛蟄龍と一緒に、現在すでに散逸した『日俄戦争未来記』を訳している¹²。なお、金松岑はまた『自由血』（煙山専太郎著『近世無政府主義』の編訳本）を訳した。彼は女権運動を鼓吹する先駆的な専門書である『女界鐘』を創作した以外に、清末四大「譴責小説」の一つとされる『孽海花』の最初の作者でもある。『三十三年の夢』を翻訳する直前の1903年8月28日に、金松岑は壮游の号で『江蘇』第5期に、中国国民の靈魂を呼びかける「国民新靈魂」という長文を掲載した。その後の1905年6月に、金松岑はまた、『新小説』第17号に「論写情小説于新社会之関

係」という、当時の写情小説を批判する小説理論文章を掲載した。

初版『三十三年落花夢』奥付の「訳者兼発行者」は「金一」だけであったが、しかし金松岑は「説略」において「訳者（金松岑自身——引用者）は和文に不案内で、その行き届かない所を助けてくれたのは、薛君蟄龍の力が大きい。このてがらの横取りはせず、謹んでここに記す。」¹³と断っているように、日本語があまり得意ではない金松岑はこの漢訳において、薛蟄龍から多大な援助を受けた。『三十三年落花夢』の漢訳については、「恭公全俠口述」との指摘もある¹⁴。この「恭公全俠」はおそらく薛蟄龍の号である「公俠」の全称であると考えられる。そのため、薛蟄龍が『三十三年落花夢』の漢訳に参与したことは確かである。そして、二人で『日俄戦争未来記』を共訳したことに加え、この薛蟄龍はまた自ら、明治一大正時期の小説家であり、かつ翻訳家でもある渋江保編『波蘭衰亡史』をも漢訳し、1905年にまた、小説『離恨天』上下冊を訳述した¹⁵。さらに、薛蟄龍は1906年12月に上海で、総合雑誌『理学雑誌』を創刊した。

『三十三年落花夢』の訳者は金松岑となっているものの、翻訳の際に不備の見られた箇所については、薛蟄龍が口頭でその不備を指摘した上で修正が行われており、この点について、薛蟄龍の貢献も大きかったと言えよう。

5. 漢訳の動機について

金松岑が『三十三年の夢』を漢訳した動機付けとして、以下の四点が挙げられる。第一に、『三十三年落花夢』冒頭の「説略」における次のような記述を通してその動機をうかがい知ることができる。

これは著者の半生の歴史である。本来は内容のすべてが中国と関係するのではない。それゆえに抄訳するつもりであったが、その思想の変動、進化は吾が国民の参考に資するに足るものとなりうる。また彼国（日本国のこと——引用者）の国民の中国に対する意向も十分うかがい知ることができる。そのうえ、中山（孫文のこと——引用者）が実質的には書中の主人公である。運動連合に関する記述は、一万分の一にすら及ばないものの、その大要を十分に察知することができる。¹⁶

これによれば、翻訳の動機の一つとして、原作における思想の変動、進化を中国の国民の手本となることができるためである。そして、日本国民の中国に対する意向を中国人に知らせるとともに、孫文の革命運動を紹介するためでもあった。

第二に、原作が強い感化力を有することが挙げられる。

『三十三年落花夢』と『自由血』の巻末にある「愛自由者撰訳書」における「三十三年落花夢」の広告において、この書が「とりわけ、頑固貪欲な者も清廉とし、意気地なし

の者も発奮させる」¹⁷という感化力をもつことを強調するとともに、これを指針にしようとする国民は一人一冊ずつ持つべきだ、と読者に勧めていた。すなわち、本書が強い感化力を持ち、国民の革命の指針となっていたことも、金松岑が漢訳をした第二の要因であると言える。

第三に、原作における滔天の侠の精神に感銘したことも、漢訳を行うに至った一つの動機だと思われる。原作は滔天の侠に貫かれている。滔天は老母と妻子を捨てて、全財産を使い果たして中国革命のために東奔西走した。康有為との熱弁において、自らが西太后を暗殺することが可能であると言うまでに侠の精神が現れている。なお、「落花の歌」中の侠の精神についてはすでに指摘が見られる¹⁸。そして、孫文は滔天の侠については、『三十三年の夢』における「孫文序」において次のように高く評価している。

宮崎寅藏君なる者は、今の侠客なり。識見高遠、抱負凡ならず。仁を懐い義を慕うの心を具え、危きを拯い傾けるを扶くるの志を發し、日に黄種の陵夷を憂え、支那の削弱を憫む。しばしば漢土に遊びて以って英賢を訪い、不世の奇勳を共に建て、興亜の大業を囊け成さんことを欲す。¹⁹

こうした滔天の侠に対して、金松岑は漢訳を行う以前にすでに深い共鳴を抱いていた。それは、金松岑は壮遊という号で1903年8月28日に、江蘇出身の留学生によって東京で創刊された『江蘇』第5期に掲載した「国民新靈魂」という文章において、中国国内の荊軻、顧憲成などを取り上げ、彼らが俠者であると認めるとともに、外国の「フランクリン、ジェファソン、ダントン、ロベスピエール、マッチニ、ガリバルジー、コシュート、バクーニン、西郷隆盛、宮崎寅藏は尤も俠氣溢れる人物である。(中略)日本男児の俠気がなければ、夷をうちはらい、幕府を覆すことができず、維新の事業を興すことができず、一躍にして一等国の地位に立つことができなかつた。」と西郷、滔天の侠を高く賞賛していることに現れている。

金松岑が滔天を世界の大人物と並称したのは、「国民新靈魂」の執筆前に『三十三年の夢』をすでに目にしていたからであろうと推測する。というのは、伝聞だけによっては、滔天をそれほど高く評価できなかったからである。だからこそ、『三十三年落花夢』の広告においても、滔天を「日本大俠」²⁰と堂々と持ち上げているのである。つまり、滔天の侠の精神が訳者に深く感動を与えたがゆえに、漢訳に至ったものと思われる。

第四に、漢訳が当時の政治状況と深く関わっていたことが挙げられる。1903年に、三十歳の金松岑は蔡元培の元に赴き、同年3月から上海愛国学社に入って愛国運動を続けた。当時、金松岑は章太炎と同じ事務室に勤めており、鄒容とは同じ部屋に住んでいた。革命を宣伝する『蘇報』の言論が過激であったため、同年6月30日に、蘇報事件が起き、

章太炎、鄒容の両者は投獄された。金松岑は手を尽くして救出に努め、同時に愛国と革命を鼓吹しようとする意志がさらに強くなったと言える。そうした背景があつて、「国民新靈魂」の執筆、『三十三年落花夢』の漢訳を決めたものと思われる。なお、当局による発行禁止の措置を免れるために、金松岑は漢訳本『三十三年落花夢』の印刷を東京の翔鸞社に依頼し、「国民新靈魂」を東京で発行された『江蘇』に掲載したと推測できよう。

以上見た四つの要因が、金松岑を『三十三年の夢』の漢訳へと導いた動機であると考えられる。

6. 翻訳上の関連事実とその問題点

田桐（1879～1930）は金訳本に対して、「江蘇人は風景に趣を添えることに長けている。そのことはこの漢訳本を通して見て取れる。」²¹と指摘したことがある。そうしたこともあり、これによれば、原作に対して趣が添えられている箇所が少なくない。まず、題名にそのことが反映されている。『三十三年落花夢』という題名は第28章「唱はん哉落花の歌」中の「嗚呼世事人事、悟り来れば総て夢なり。悟らざるも亦夢なり。夢の世に夢を逐うて、また更に新なる夢に入る。唱はん哉、落花の歌。奏せん哉、落花の曲」によつたものと思われる。それゆえ、この「落花夢」という意味は原作における滔天の挫折、失敗した理想に対する感傷と合致している。

上述の金松岑の「説略」において、「原文は約十三万字で、初訳稿は約七万字であつた。そして、今また五万字余りに抄訳した。とはいえ、記述してある事実はそのままで、典雅で文語的な文体を用いていることに自信を持っている。」と述べている。さて、『三十三年落花夢』が確かに上述の金松岑の言のとおりであるか、検討してみる。

原作に付された、「吞宇 清藤幸七郎」、および「無何有郷生」と署名した武田範之の序、滔天の自序、および頭注は漢訳本ではすべて省略され、孫文の序だけがそのまま残っている。そして、原作中の滔天の写真に加えて、新たに孫文の写真が付加されている。なお、金松岑自身の二百字余りの「説略」が冒頭につけられている。

この『三十三年落花夢』は、初の漢訳本である『孫逸仙』とは異なり、内容は別として、原作『三十三年の夢』の形を取り、同じく二十八章から成るものである。なお、訳本は「訳者が再度、簡潔で洞察力に満ちた筆致をもって、華光異彩を放ち、翻訳界において稀に見られる」²²ものとして評価されている。しかし訳者自身が日本語に不案内であつたため、他人の力を借りて訳しており、そのことが訳文にどう影響したのかが問題となる。ここでは、原作と対照させながら幾つかの例を取り上げ、漢訳上における問題点を明らかにする。

(1) 削除

「説略」によると、原作の日本語では十七万字ほどあつたものが、中国語に漢訳される

と七万字にまで縮小した。その後さらに五万字にまで削減された。つまり、大幅に削除されたことが明らかである。削除された内容からその理由を推測することができる。

前半の第6章までは削除された部分は多くない。しかし、第7章から徐々に大いに削除され始める。例えば、第11章「暹羅遠征」、第12章「帰国中の三ヶ月」、第13章「第二の暹羅遠征」、最後の第28章「唱わんかな落花の歌」などは大幅に削除された。その理由は恐らく滔天と暹羅の関係だけでなく、中国と関わっていないため、削除したのであろう。それに対して、第17章「興中会首領孫逸仙」、第26章「与孫逸仙書」、第27章「惠州事件」などの、孫文および中国革命に深く関わる章はほぼ全訳されている。なお、母親、妻以外の、滔天と関わった女性はほとんど削除された。つまり、政治宣伝のため、中国革命に密接に関係する章節を際立たせようとしたため、大幅に削除したのであろう。そして、文章があまりにも長すぎると宣伝にも不利だと考えられたと思われる。

(2) 略訳

削除のほかに、略訳も作品に散在している。以下のような例が取り上げられる。第6章「耶蘇教徒となる」には、「当時余が郷に得る……その理由や前と同じ」三百四十字の段は「以月費不給」の五文字に略訳された。第7章「思想の変遷と初恋」には、「しかりといえども……ここに識る女性の涙には不動も敵せぬ妙力あるを」という四百五十文字の二段は、「天下事屬於既往之界、苟回首思之、未有不足以供驚且笑」の二十三文字に略訳された。第11章「暹羅遠征」には「移民会社員の喜び一方ならず、……余や無信の閑隙に乗じてその欲情を漏らしたる一種の盗人と謂うべきなり」の二千字余りは「天下声色貨利死生利害之間、可以拳搥脚踢而破之」の二十一字に略訳された。

(3) 改作または置換

原意に沿わなく、改作または取替えた例がよく見られる。

第6章「耶蘇教徒となる」中の「時日は回轉して盛夏の候となり」は、「流光似水、櫻花已謝、而榴火將明」に取り替えられた。第9章「夢寐の郷国に入る」中の「すなわち君等と根底の道を異にするに至る、また共に事に従う能わずと」は「余自信此行之無益、而且有危道。故願易辦事之方針、復歸於求學。」に改作された。第24章「大本營——佐渡船中」中の「翌朝起上れば、話は過ぎし一週間の繰事より生まれり」は「驚魂定而勞苦慰藉之事起」に取り替えられた。

(4) 誤訳

誤訳と改作は区別しにくい。もし改作、意識の角度から見れば、誤訳があまり多くみられない。

第6章「耶蘇教徒となる」中の「楽しき日曜は来りぬ」は「下日曜」にされた。第7章「思想の変遷と初恋」中の「曰う他処に動かずして吾が到るを待てと、すなわち命の如くす」は、「曰知往他処待吾来即如命」（なお、王文英が句読点をつけた訳本には、「曰

『知往他処、待吾来、即如命』と誤っている。)と誤訳された。第23章「新嘉坡の入獄」中の「然れども余は先ず問を發せり、君は人を見誤るにあらざるかと」は「余先發問曰君此来為何」とされた。

(5) 移動

漢訳本における原作に対する移動は多く見られない。ほとんどは原作の順序に則っている。以下の移動は文脈の流れを考慮に入れたものと言えよう。

第9章「夢寐の郷国に入る」には、段落の末尾に「これ明治24年5月」は該当段落の冒頭に繰り上げられた。第11章「暹羅遠征」中の冒頭の三つの段落は前の第10章「無為の四年間」に繰り上げられた。第19章「康有為日本に入る」の末尾部分の「時に三十一年二月なり」は前の第20章「南洋の風雲と吾党の活動」の冒頭部分に移動された。これはこの時間を際立たせるために冒頭に繰り上げたと思われる。

(6) 加筆

宣伝の角度から削除、略訳された箇所がかなり散在しているが、しかし上下文の意思を通じさせるために、とりわけ前に江蘇人としての金松岑は「趣を添える」ことが得意であると指摘されているように、加筆の箇所がよく見られる。とくに、各章の冒頭の詩のような言葉は、ほとんど金松岑の加筆である。

第6章「耶蘇教徒となる」の冒頭には「莊子曰『逃空虚者聞人足音蹙然而喜而況乎兄弟親戚之声效其側者乎』」が加えられている。第14章「嗚呼二兄は死せり」の冒頭に「『向国惟看日帰帆但信風』」という詩が加筆された。第16章「再び夢寐の郷国に入る」の冒頭には「『老驥伏枥志在千里烈士暮年壯心不已』」が加えられた。第19章「康有為日本に入る」冒頭には「揮金結客者、日本男兒之天性乎」が加えられた。第27章「惠州事件」の冒頭には「惠州事件の敗北」を強調するために、「惜命惠州革命之事之不成！惜哉惠州革命之事之不成！」という重ねた言葉を加筆した。

(7) 誤植

第9章「夢寐の郷国に入る」中の「明治24年5月」は滔天が初めて中国大陸に入った時間である。訳文には「一千八百九十一年、実明治三十四年五月」となった。西暦に直された年代は正確であったが、しかし「明治三十四年」は「明治二十四年」の誤植である。

(8) 未訳（単語をそのまま写す）

中国語中に存在しない、或いは同形異義の単語は訳さなくてそのまま写し取っている例が多く見られる。

第4章「中学校及び大江義塾」中の「泥棒」、第5章「自棄の卵子の反動」中の「卵子」、第6章「耶蘇教徒となる」中の「日曜」、「細君」、第12章「帰国中の三ヶ月」中の「汽車」、第18章「素人外交家」中の「素人」、第19章「康有為日本に入る」中の「女

将」などは、そのまま使用された。

以上は原作と訳文を対照させ、各問題点について、幾つかの具体的な例を取り上げた。これによれば、以上のような漢訳上における問題点が、作品に散在していることが分かる。

約十七万字の『三十三年の夢』は五万字あまりの『三十三年落花夢』に変身した。文章の長さから言えば三分の一弱に抄訳されたが、しかし内容から見れば、三分の二が漢訳されたと思われる。訳者自身が「記述してある事実はそのままで、典雅で文語的な文体を用いている」と自称したように、訳文は文才に恵まれたものである。

7. 『三十三年落花夢』の政治宣伝に見られる影響

近現代中国において『三十三年落花夢』の政治宣伝に見られる影響は、以下のような一連の事実を通じてうかがい知ることができる。

金松岑の同郷人で、同じ年である陳去病（1874～1933）は1904年に、「論戯劇之有益」で、対比の角度から演劇の「同化力」を称えていた。演劇の宣伝効果について、『革命軍』、『駁康書』、『黄帝魂』、『落花夢』、『自由血』などの書より、「殆千万倍」の効果があると結論づけた²³。逆に言えば、『三十三年落花夢』などの宣伝の役割がすでにある程度評価されているうえのことと考えられる。

1905年9月に創刊した広州『時事画報』雑誌はまた、『三十三年落花夢』を転載していた。このことから、『三十三年落花夢』の読者がさらに増えたことが推測できる。1925年に『三十三年落花夢』を再刊したP.Y.と署名した人は、少年時代の友人の間では最年少であったが、しかしなかなか手に入らない本を何冊か読むことができた。読んだ本の中に『三十三年落花夢』が入っていた。当時の楽しさは記憶の中にあって、二十年后でも新しく感じ、そこで孫文死後まもなく再版に着手したという²⁴。当時、P.Y.のような青少年は恐らく少なくなかったであろう。

実際、『三十三年落花夢』の影響範囲は中国国内にとどまることなく、在日中国人留学生は漢訳本を通じて孫文に対する理解を深めることができたと思われる。

辛亥革命の先駆者である田桐は、1903年冬に日本に留学し、かつて宮崎滔天宅にしきりに出入りしていた²⁵。彼はまた、滔天の宣伝誌『革命評論』の購読者であった。後に彼は江介散人の号で『孫逸仙』『三十三年落花夢』の政治的影響について次のように回想している。

この二書（『孫逸仙』『三十三年落花夢』を指す——引用者）が刊行された後、孫文の名は、学生の胸に深く染み込み、革命と保皇の色彩もまたはっきり別れた。（中略）金松岑が革命を鼓吹する文は甚だ多いが、特にこの書（『三十三年落花夢』を指す——引

用者)が最高である。²⁶

なお、吉野作造は『三十三年の夢』を知ったのは、案外に日本滞在中の中国人の戴天仇(季陶、1890～1949)、殷汝耕(1889～1947)二人から聞いたからであると言う²⁷。言うまでもなく、『三十三年の夢』および日本で印刷された漢訳本『三十三年落花夢』は在日中国留学生の間での影響力がいかに強かったか想像することができる。

そして、周作人(1885～1967)の思い出によれば、魯迅(1881～1936)は1906年の秋冬の交に、滔天を尋ねたことがある。『三十三年落花夢』は当時中国の知識人たちによく知られていることがうかがわれ、周作人が知っていた訳本は『三十三年落花夢』であることも分かる²⁸。

中国商業の巨頭と言われた康心如(1890～1969)は、思想啓蒙の青年時代に『三十三年落花夢』の影響を受けていた。当時早稲田大学留学中の長兄康心孚の支持と指導の下で、康心如が経営していた本屋は、主に『三十三年落花夢』『民報』『革命軍』『黄帝魂』など民主革命思想を宣伝する書籍を販売していた²⁹。

実際、辛亥革命以降の中国国内において、『三十三年落花夢』の影響力も依然として存在していた。なぜなら、まず、前述したような度重なる再版の数を見てもその影響力の大きさが十分うかがわれるのである。次に、以下のような事例を通じても同様にその影響力の大きさが読み取れる。例えば、1915年に、張恨水(1895～1967)は「文明劇団」に従って、かつて『落花夢』を演じたことがあると言う³⁰。この『落花夢』の脚本は『三十三年落花夢』である可能性が高いと思われる。そして、1917年4月に、湖南師範学校時代の毛沢東(1893～1976)、蕭植蕃(1896～1983)が黄興(1874～1916)の葬儀に出席するために中国に赴いた滔天に講演してもらおうという書簡が今でも保存されている³¹。当時の毛沢東らが滔天のことを知ったのは、恐らく『三十三年の夢』の漢訳本からであると考えられる。

1935年の「一二・九」運動時期の学生リーダーの一人であり、後に北京市委書記となった劉導生(1913～)はその少年期に、『三十三年落花夢』を啓蒙書として読んだという³²。

以上のような一連の実例から考え合わせると、1934年5月に至って十六版まで刊行された『三十三年落花夢』は、政治家や知識人、青年学生、留学生、および少年など幅広い読者層を持っていた。言い換えれば、『三十三年落花夢』は、当時中国の各階層に与えた政治的思想的影響力が小さくなかったのである。上述のように時間だけから見れば、その影響力は三十年余りにわたって衰えなかったことも分かる。つまり、『三十三年落花夢』に現れる孫文および滔天の革命思想が、当時の激動の近現代中国に、新しい息吹を吹き込んだと言える。

8. おわりに

以上、『三十三年の夢』のもう一つの漢訳本『三十三年落花夢』に関する版本、訳者、翻訳動機、訳文、およびその政治的影響などについて考察した。

『三十三年落花夢』は、政治宣伝の視野から漢訳されたのである。それにより、この漢訳本は当時の清末中国ないし民国時期において革命を宣伝するための政治的影響力や感化力が相当強かった。その影響が及ぼした期間は、初版された1904年から同年中に三つの版（大達図書供応社版、中国研究社版、出版合作社版）が再版された1934年にかけて少なくとも三十年余りにわたった。孫文と滔天の名は、『三十三年落花夢』によって多くの中国人に知られたのみならず、革命思想の啓蒙と普及もそれに伴って広く進められていったのである。

『三十三年落花夢』は完訳本ではないものの、政治宣伝分野にのみならず、文学分野に及ぼした影響も過小評価することはできない。『三十三年の夢』は清末中国に導入された明治日本の文学作品において、政治、文学二つの分野でともに、強く影響を与えた、最も重要な一作である。

『三十三年落花夢』は『孫逸仙』ほど広く普及しなかったと指摘されている³³。政治宣伝の角度から言えば、清末時期に限ると、そうした面も持ち合わせていたことは否定できないものの、清末政治小説に及ぼした影響の視角から見れば、その指摘は適切ではないと思われる。その一方で、前述したように民国時期に入って『三十三年落花夢』はむしろ広く読まれていた。つまり、清末小説に及ぼした『三十三年の夢』の影響は『三十三年落花夢』によるものであった。

今後は、清末中国において、『三十三年落花夢』を媒介として『三十三年の夢』の受容の痕跡を検討する必要があると思われる。

注

- 1 この初版の公刊時間は同年10月12日以後の秋だと推測すれば適切だと考えられる。拙稿「『三十三年の夢』の漢訳本『孫逸仙』について」（『言語文化研究叢書』第8号、2009年3月）を参照されたい。
- 2 この発行時間については、ほとんどの日中両国の研究者は『孫逸仙』と同じ年に刊行されたと指摘している。例えば、林啓彦「写在『三十三年之夢』中訳本前面」（宮崎滔天原著、佚名初訳、林啓彦改訳・注釈『三十三年之夢』花城出版社1981年8月）、「孫逸仙・編者注」（章含之、白吉庵主編『章士釗全集』第1巻、中華書局、2000年2月）、島田慶次「『三十三年の夢』あとがき」（『隠者の尊重：中国の歴史哲学』筑摩書房1997年10月。初出『三十三年の夢』岩波書房1993年5月）、芦益平「アジア民主革命の先駆者・宮崎滔天——辛亥革命九十周年のために」（『社会文化研究所紀要』48、2001年7月）、山室信一「宮崎滔天『三十三年之夢』」（『文字』終

『三十三年の夢』の漢訳本『三十三年落花夢』について

- 刊号 2006 年 3 月)、および『中国二十世紀通鑑 (1901-1920)』(養育之主編、線装書局 2002 年 9 月 p 148) などがある。その指摘は適当ではないと思う。その理由は、『三十三年の夢』の刊行時間は旧暦で言えば 1903 年 11 月 25 日、もし西暦の場合は 1904 年 1 月 12 日である。そのため、旧暦か西暦か言わない前提の下で「同じ年」を言うと不当だと思われるからである。
- 3 吉野作造「三十三年の夢・解題」初出『帝国大学新聞』第 168~170 号、題名「『三十三年の夢』——その再刻について」1926 年 5 月。底本は宮崎滔天著、宮崎龍介・衛藤藩吉校注『三十三年の夢』(平凡社 1967 年 10 月) 所収による。
 - 4 前掲拙稿「『三十三年の夢』の漢訳本『孫逸仙』について」を参照されたい。
 - 5 章士釗「孤桐雜記」『甲寅週報』第 1 卷第 4 号 1925 年 8 月 8 日。底本は『章士釗全集』第 5 卷 (2000 年 2 月) による。
 - 6 楊友仁は「金松岑先生行年与著作簡譜」(『清末小説研究』第 6 期 1982 年 12 月) において、P.Y. は金松岑のペンネームであると指摘しているが、楊の指摘に誤りがある。下記の注 7 を参照されたい。
 - 7 P.Y. 「重印贅言」(底本は、王文英標点『新式標点：三十三年落花夢』<上海・大達圖書供給社 1934 年 2 月>による。日付は同じく 1925 年 4 月 20 日である。) の内容によれば、P.Y. と金松岑は同一人物ではないことが明らかである。なお、この後に対照するように、楊友仁の同文章において、この P.Y. 訳本と金訳本が全く同じだと指摘も適切でない。
 - 8 前掲島田慶次「『三十三年の夢』あとがき」。
 - 9 前掲楊友仁「金松岑先生行年与著作簡譜」によると、この A.K. は金一の英文名である。
 - 10 前掲林啓彦「写在《三十三年之夢》中訳本前面」。
 - 11 この訳本は目を通した。訳者林啓彦の「写在《三十三年之夢》中訳本前面」において、「六、七十年間、竟無一部完整而忠実の訳本、実為遺憾。(六七十年間、意外に忠実な全訳本がなく、誠に残念である。)」と指摘している。そこで、該当訳本は忠実な全訳本であるという意味にも読み取られかねない。確かに題名もそのまま訳されたし、書式の違いのため、頭注が横に付けられているが、しかし清藤幸七郎序、無何有郷生と署名した武田範之の序、および目次は現れていない。とくに、文中の訳し漏れた部分などがしばしば見られる。
 - 12 「金松岑生平事迹 (三)」< <http://218.4.65.122/ReadNews.asp?NewsID=110> >。なお、この『日露戦争未来記』は法令館編 1900 年 11 月と 1901 年 5 月に発行された二冊の『日露戦争未来記』の漢訳ではないかと推測する。
 - 13 訳者誌 (金松岑) 「説略」、金一訳『三十三年落花夢』上海国学社 1904 年 1 月。
 - 14 前掲「金松岑生平事迹 (三)」。
 - 15 樽本照雄『新編増補清末民初小説目録』齊魯書社 2002 年 4 月。
 - 16 前掲「説略」
 - 17 金一訳『三十三年落花夢』(上海国学社 1904 年 1 月) と金一訳『自由血』(鏡今書局 1904 年 3 月) を参照されたい。
 - 18 古江研也「宮崎滔天『三十三年の夢』論」『国文学年次別論文集近代』4 (昭和 60 年)、1987 年 7 月。初出『方位』第 9 号、1985 年 12 月。
 - 19 日本語訳は、宮崎滔天著、島田慶次・近藤秀樹校注『三十三年の夢』(岩波書店、1993 年 5 月) による。
 - 20 注 17 を参照されたい。

- 21 田桐「閑話革命」『太平雜誌』第1卷第2期1929年11月1日。
- 22 初版『三十三年落花夢』所収の「愛自由者撰訳書」広告による。
- 23 陳去病「論戲劇之有益」、初出『警鐘日報』1904年8月21日、24、26日号、その後『二十世紀大舞台』第1期再録、1904年10月。
- 24 前掲P.Y.「重印贅言」。
- 25 築地宜雄「宮崎滔天」『宮崎滔天全集』第5卷所収p495。
- 26 前掲田桐「閑話革命」。
- 27 前掲吉野作造「三十三年の夢・解題」。
- 28 周作人「同郷学生」『魯迅的故家』河北教育出版社2002年1月p291、292。
- 29 『中国百年商業巨子康心如』
< <http://www.mypcera.com/book/2003new/li/zhuanji/zgbnsyiz/004.html> >
- 30 「張恨水年譜」、底本は張占国、魏守忠編『張恨水研究資料』（天津人民出版社1986年10月p195）による。
- 31 『宮崎滔天全集』第1巻写真を参照。
- 32 劉導生「我的引路人——姑母劉靜君」『炎黄春秋』2004年第5期。
- 33 章士釗「疏黄帝魂」（初出『辛亥革命回憶録』第1集、1961年10月。底本は『章士釗全集』第8巻中華書局、2000年2月。）と前掲「孫逸仙・編者注」はともに『三十三年落花夢』より『孫逸仙』のほうが「入人深而推行遠（人に深くまで浸み込み、遠くまで普及した。）」と指摘している。

付記

本稿は筆者の博士学位論文『清末政治小説における明治政治小説の導入と受容——日中近代文学交流の一側面——』の第五章をもとに若干の加筆修正をしたものである。